

松沢弘陽著「日本社会主義の思想」

TAKAHASHI, Hikohiro / 高橋, 彦博

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and labour

(巻 / Volume)

20

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

1974-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006688>

《書評》

松沢弘陽著『日本社会主義の思想』

高橋彦博

一、はじめに

戦前の日本資本主義分析に関するマルクス主義の理論的成果を金字塔的地位にあるものと評価したのは丸山眞男氏であった。しかし、同時に、丸山氏は、戦前のマルクス主義の日本資本主義に関する構造的分析の枠組においては政治学が不在であったことを指摘せざるをえなかった。丸山氏のこの指摘は、とくに、戦前の天皇制に関する理論的分析の領域で、鋭く、かつ具体的に展開されていった。われわれは、丸山氏の超国家主義のイデオロギーの解明の視座と方法の中に、戦前のマルクス主義における天皇制の社会的・経済的基礎の解明を補う、新しい方向を見いだした。この新しい方向は、さらに、石田雄氏によって家族国家観の形成過程と展開過程の問題として、または藤田省三氏の天皇制国家の支配原理の問題として、受けとめられ、克明な解明がつづけられた。私が理解している限りでは、松沢弘陽氏における日本社会主義運動の思想構造の解明も、戦後にお

ける、以上のような、マルクス主義の機構分析の一面性を補う方向性をもつ新しい視座と方法による試みとしてつづけられてきたものであった。少なくとも私は、松沢氏の著作『日本社会主義の思想』を、以上のような研究動向の中に位置づけて受けとめたいと思う。

ところで、丸山氏の超国家主義のイデオロギーに関する分析は「天皇制ファシズム論」を「日本ファシズム論」と希釈してとらえ、マルクス主義的機構分析の帰結点を出発点として評価するのではなく、マルクス主義的機構分析の否定の上に戦後の新しい政治学の確立を試みる志向性を含むものであった。井上晴九・宇佐美誠次郎『危機における日本資本主義の構造』（一九五一年）が「天皇制は、機構としては……絶対主義が勝ち、機能としてはファシズムが勝った存在である」としていたように、「天皇制ファシズム論」こそ日本のファシズムに関するマルクス主義的分析の帰結点であるとともに、その「天皇制ファシズム論」においては、機構分析を補う視座として機能分析の

方法が新しく示されていたのである。だが、丸山氏などによる
 ▲日本ファシズム論▽は▲天皇制ファシズム論▽を補うものとしてではなく、むしろ、マルクス主義的機構分析との一定の距離を強調するあまり、むしろ、マルクス主義的機構分析の否定者として自己を位置づける方向性を強く示していたというのが私の把握である。松沢氏の今回の著作に接するにあたって、私がなによりも注目すべき問題点と考えるのは、かつての▲天皇制ファシズム論▽と▲日本ファシズム論▽との関係の問題を、松沢氏は、私にあらためて確認させてくれるか否かであり、松沢氏における日本社会主義運動の思想的分析がこのような問題にどのような解答を与えているであろうかということである。だが、その解答を見いだすためには、ひとまず、松沢氏の、緻密な、透徹した、行間に思想的格闘の跡の滲み出ている、特有の論理実証の世界に入らなければならない。

二、明治社会主義論

明治社会主義というとき、われわれはそれを片山潜によって代表させてきた。幸徳秋水が論じられるときも、田添鉄二が問題にされるときも、片山潜との比較によって、あるいは片山潜との関係づけによってその位置が確定されてきたといえる。片山潜の労働組合への期待や都市社会主義への幻想が、いかなる過程を経てマルクス主義国家論に媒介された天皇制絶対主義権力の認識へ進化するか、そこに日本におけるマルクス主義の発

展の歴史があり、日本における労働運動と社会主義運動の道すじがある、というのが大方の場合のいわゆる運動史のとらえ方であったと思う。そのような片山潜に代表させるこれまでの明治社会主義論に対し、松沢氏による明治社会主義論はどのような新しい問題点を提起しているのであろうか。

松沢氏は、明治の社会主義者が「重層的なひろがり」をもつ存在であったことを指摘している(六頁)。この指摘がまず重要であろう。明治の社会主義者の多様性の認識と、その多様性の解明が、直ちに明治の社会主義運動の分裂の原因を明らかにする作業に結びつくからである。しかし、多様性の根源的解明への過程は長い。長い過程を短絡させる意味で、方法論から入ることにしたい。

松沢氏は、明治の社会主義者の重層構造を解明するさいに、その方法論的視点が社会主義者の▲キヤリア▽に注目するものであることを明示している(二頁)。運動史において指導者への▲キヤリア▽への注目は当然な方法といえるかもしれない。理解の仕方によっては、▲キヤリア▽概念を単なる経歴としてではなく、むしろ行動様式に近い▲ミッド・ポイント▽を意味するものととらえることができるのであるが、松沢氏の場合にはあくまで経歴という意味の▲キヤリア▽になっている。松沢氏は、比較的簡単な▲キヤリア▽の分析によって、多様な明治の社会主義者を、「前世代」「中心世代」「後世代」の三層に分解して見せている。この三層において「中心世代」とされている

のは徳富蘆花、高野房太郎、木下尚江、堺利彦、田岡嶺雲などである。さらに松沢氏は、この「中心世代」の特徴を「幼少年期に自由民権論の影響を強く受けた」点に求めている（一六頁）。松沢氏によれば「幼少年期に自由民権運動を経験した『明治の子供』世代こそ、後にも見るように、社会主義を『しっかりと抱いて居た』『中心人物』の主力を供給した」とされているのである（五頁）。

今日、われわれは、七〇年代における日本の革新統一戦線を展望する視野をもち、その視座から、日本における半世紀余の社会運動の歴史をふりかえるわけである。その際、なによりも目につくのは、近代史の端緒の時期における自由民権運動の存在であり、自由民権運動とその後の社会運動の連続性の問題ではなからうか。たとえば、一九二〇年代における前衛党の結成も、今日では、「自由民権運動以来の革命的民主主義的伝統の正しい継承者」としてなされたものであることが実践運動の場において確認されるにいたっているのである（『日本共産党の五〇年』参照。この視点は「日本共産党の四〇年」「日本共産党の四五五年」では明確にされていない）。結党時から「民主権」をめざしていた伝統をもつ前衛党の存在によって、今日、七〇年代の革新統一戦線の展望が明らかにされているといえる。その意味からも、明治の社会主義者と自由民権運動とのかわりを追究する視点の今日的意義は大きく松沢氏の問題提起のもつ意味は重要といえよう。

ところで、松沢氏が、明治の社会主義者の重層構造を説明する方法論として明らかにしているのは指導者の△キャリア▽への注目であった。政治史なり運動史への思想的接近の嚮導概念としてのキャリアはいかなる意味内容をもつものなのであるか。たとえば、思想的の方法を意味する分析用具としてわれわれは△frame of reference▽なる概念を知っている。△準梃桿組▽としようが△関係づけの枠▽としようが、それはいわば、集団ないし個人の行動の背景にあるものであり、状況への対応を目ざす価値意識とでもいうべきものであった。のちに見るように、松沢氏自身、六〇年代初頭において、日本政治史への思想的接近の方法論として、一度は△準梃桿組▽の視点を確立していたのである。また、みるべき思想的接近の業績をいくつか辿ってみれば、たとえばかつて佐藤誠三郎氏と三谷太一郎氏が、ともに△引照基準▽なる嚮導概念によりつつ、あるいは川路聖謨論を展開し、あるいは原敬・田中義一論の形による転換期政治過程の分析を試みた例があった（篠原一ほか編『近代日本の政治指導』一九六五年参照）。松沢氏の△キャリア▽概念は思想史の方法の△準梃桿組▽概念といかなる関係に立つものであろうか。

日本の政治史への思想的接近についていえば、△準梃桿組▽概念のつぎに注目されたのはおなじく嚮導概念としての△権力衝動▽であった。△権力衝動▽とは△準梃桿組▽の政治史一般への一つの具体化の試みにはかならなかった。△権力衝

動Vとは、たとえばマイネッケのいうクラトスであり、直接的にはG・リッターの『権力の悪魔性』からの援用による分析概念であった。萩原延寿氏によって陸奥宗光が「権力と理念を結ぶ政治技術の視点」においてとらえられ、三谷太一郎氏によって原敬が「課題(ザッヘ)への献身」においてとらえられたとき、それらのキイ・ワードは神島二郎氏が幕末維新の革命家の八権力衝動Vとして指定した「正気論」に対応するものとして位置づけられている(神島二郎編『権力の思想』一九六五年、参照)。そして、松沢氏も、この八権力衝動Vの指導観念によって伊藤博文における「インバースナルなザハリッヒな態度」を握り当てているのであった(同上書、参照)。

松沢氏は、今回の著作において明治の社会主義者の八権力衝動Vとして「立志」を指定し、「立志」によって「天地の公道」や「民権の大義」といった普遍的な理念への志向性と、同時に存在する「強い国家関心」とを巧みに説明している。だが一方でハキリアVを問題にし、他方で八権力衝動Vを問題にするその複眼的な視点の構造は明らかにされているとはいえない。さらに松沢氏は、明治の社会主義の理論構造を「進化」の基本発想において説明しているのであるが(五〇頁)、「進化」論的発想を問題にするイデオロギー分析の視点と「立志」の潜在的志向性を問題にするより深層な次元における思考分析の視点との組み合わせ方も、明文として、あるいは行間において、何等かの形で説明されているとはいえない。これらの点に、あ

えていえば方法論的不明決さが残る。もっとも、方法論的不明決さというのは私の読みの浅さのゆえであり、松沢氏は、明治の社会主義者の多様性を明らかにするため、多様な諸側面に照明をあてる必要上、多様な方法を組み合わせて使用したのであったかもしれない。そうであるとすれば、松沢氏において、方法論は単一の視点として確立されていてそこから対象の特徴的な側面が論理的に整然と引き出されるという構成が採用されているのではなく、まず、対象の特性認識についての仮説設定があり、その仮説を立証するため対象に適合的な方法が松沢氏の基本的な方法論的問題意識の転化形態として案出され駆使されるという構成が採用されていることになる。

それにもせよ、松沢氏は、明治の社会主義を社会主義者の群像においてとらえ、まずハキリアVによる分類を行ない、つぎにその社会主義者達に共通する「進化」論的社会主義の理論水準を明らかにした。さらに松沢氏は、「社会問題」認識から社会主義理論への転換過程における個人主義的要素の欠落化を指摘し、「早発的な国際的『正統病』(五三頁)の発生を指摘している。それとともに、「立志」にまつわる「利益」の追求から出発しながら、その「利益」が日本の早熟資本主義における特権性への収斂や、運動の一部におけるアナキーな収束への方向をとるのではなく、いかにして「公的」秩序へ収束する方向をとるにいたるかがとくに主要な関心対象として追究され分析されている。

明治の社会主義者の重層的な構造にもかかわらず、明治の社会主義者に共通する「進化」論的社会主義があり、その「進化」論的社会主義が「欧米社会主義の一般理論の翻案」的な色彩の濃いものであったとして、問題なのは「これが理解・受容され行動に具体化される過程には、彼らの育まれた日本の思想的文化的伝統さらに彼らの『時代の精神』によって規定されたより基層的な固有の発想や思考様式」が働き、そこにこの『尖端』部分とより基層的な『魂』の間のズレの問題が生じる可能性がある（五六頁）という点であった。ここで指摘されている「ズレの問題」は、単に表層と基層との間の「ズレ」を意味するだけではなく、『魂』の次元」における多様性を意味する。この「ズレの問題」が明治の社会主義が大きく分裂せざるをえない要因であったとされているのである。ここでようやく、松沢氏によって明治社会主義の多様性の根源的解明がなされているのである。

平民社を論じ、幸徳秋水を論じ、片山潜を論じるとき、松沢氏は、既成の明治社会主義論や幸徳論・片山論に対しては一瞥だに与えていない。これまでの研究成果が史料として利用されることはあっても論究過程の要因として位置づけられている例はまったく見受けられない。そこに松沢氏の視点と方法についての自負をうかがうことができるし、またそれだけの成果をわれわれとしても確認できる。たとえば幸徳と片山が対比されて論じられ、その対比は一般的な把握でありながら、幸徳と片山

における「基層的な魂」の別扶がこれまでの運動史的把握をこえる思想的深化を示すものとなっている。明治社会主義における議会主義と直接行動主義への分化の根底にあるのは信奉対象として「原始化した儒教」をもつ「志士仁人」的社会主義であった（六〇頁）。幸徳は「志士仁人」的社会主義者の代表的人物であった。これに対し、特異なのは片山である。片山も「志士仁人」をいわないわけではなかったが、片山の「思想の基調」をなしたのは『労働』の観念」であった（七六頁）。片山における労働者社会への志向が、片山の労働者組織論と都市社会主義論を生みだしているのがあった。とくに都市社会主義論において、片山が国家と都市を峻別する視点をもっていた点が評価されなくてはならないとされている（八九頁）。片山の都市社会主義論への注目ほかにもなされている例が無いわけではないが、それは都市化現象に対応する現代マルクス主義の視点からする都市社会主義論再評価としてであって、松沢氏の場合におけるような、多元的発想を秘めた社会主義の理論構築に対する評価という視点からではないことに注意しておく必要がある。

こうして、明治社会主義における多層構造は、「立志」に伴う「利益」が「進化」論的社会主義の理論枠組の中で、いかにして、一方ではアナキーの方向へ、他方では「公」的秩序の方向へ収斂されていったかという問題点において解明される。そこに明治社会主義の多層構造における「ズレの問題」を見い

だすことができるのであった。さらに、明治社会主義の分裂の結末の主要因を発見することができるのであった。

一言つけ加えれば、幸徳の「自己利益追求のフナーキー収束」に片山の「『都市的公共の精神』の次元」を対比させることに成功した松沢氏の方法論は、あえていえば八準梃桿組Vを嚮導概念とする方法論を志向するものではあったが、実際には八権力衝動V概念の使用とか、イデオロギー分析の痕跡に、思想史の方法としての不明快性、ないし多岐性を感じさせるものであった。そして、松沢氏の明治社会主義論は六〇年代後半の作品であり、したがって六〇年代前半の他の論稿の方法論との時系列的連関が問題にされるべきであるが、以下ではその点を無視し、あくまで今回の著作における章別関連における方法論の推移を問題にしていくことにしたい。

三、大正期労働運動の意識分析

一九一〇年代の、ようやく階級として形成されつつある日本の労働者階級の意識構造の分析について、松沢氏は実に見事な手法を見せている。友愛会の総同盟への転化・職別化と前衛党の結成という図式的な把握で概括されてきた大正デモクラシー状況における労働運動であったが、その労働運動の意識面における実態について、松沢氏は赤裸といえるほど内面的な分析を試みている。

松沢氏によれば、一九一〇年代の日本の労働者階級の意識の

世界の現実とは、「成功」熱であり、「温情」への飢えであり、「自己卑下」であった。したがって、労働者の運動は、「出世主義」と「自覚と修養」を主内容とするものとなっていた（一二九頁）。このような意識状態にある労働者に対する社会主義理論の注入は、煽動によってのみ可能であった。社会主義理論の持込みのトレーガーである「学校出の社会主義者」の「先駆」性を支える意識内容も、「強烈な権力衝動」であり「先物買いのエネルギーイズム」であったので、「情緒から醒めた、言葉で自覚して使い、相手である労働者との間に確実なコミュニケーションを作り出すという主体性」は乏しかったのである（一五九頁）。社会主義理論の注入はプロバガンダとして行なわれ、ラディカリズムとしてのサンジカリズムを帰結したのであった。労働運動の、この衝動主義的段階からの脱却を「理論」と「組織」によって企てるものこそ、マルクス主義にほかならなかった（一七五頁）。

松沢氏の、一九一〇年代の労働者意識論は明確な方法論的自覚をもってなされている。松沢氏の方法論は、T・パースンズやR・マートンによるものであり、一言でいえばシステム論である。松沢氏の大正期労働運動の分析は、思想的接近ではありながら先の明治社会主義論と異なり、システム論的方法を採用し、八準梃桿組V設定の視点は必ずしも明確なものではない。松沢氏が構築したシステム論的モデルとは、体制の価値体系が基軸に据えられ、その下属的価値体系の統合が社会に遍在する

不滿の分布図に対応する形で展開されるとするものであって、明らかに一元的なものである。このシステムから、労働者の意識構造が「業績原理」「身分原理」「共同体的価値体系」「都市的価値体系」の諸側面で浮彫にされたのであった。以下に、松沢氏の、本書においては数少ない、方法論的問題意識を思わず吐露したと受け取れる部分を紹介しておきたい。松沢氏のシステム論への傾斜を充分に示す一節になっていると思われる。

「小論では体制統合という場における労働者の位置と、その体制統合からの離脱とを考えるにあたって次のような仮説をたてている。すなわち(1)体制の価値体系の内容と存在形態、(2)その下属的価値体系の統合が、(3)体制の諸社会層にわたる社会的不滿の分布配図―各社会層での不滿の質と相対的な強さ、(4)不滿に対する反応様式、(5)それに対する効果的な再統合方式を条件づけると考え、小論では、(1)として業績原理(「成功」)、身分原理―主体志向(「全体」)のために「無私献身」、及び価値体系のあいまい性、(2)として共同体的価値体系と産業Ⅱ都市的価値体系の慢性的葛藤、に注目する。このような視角をとることによって、一般的に見られる、国民経済の再生産構造における産業労働の位置から直ちに体制統合におけるプロレタリアートの政治的位置をも導く方法の制約を補えると考ええるからである。」(一三九頁)

松沢氏のシステム論的方法論において問題なのは、第一に、そのシステムが体制的価値体系を基軸とする一元的なものとなっている点にある。なぜ、明治社会主義論において確認されたような日本社会主義の普遍的価値への献身という志向性が一木の對抗軸として設定されることがなかったのであろうか。第二に、第一の点と関連するが、労働者の意識構造の把握が、全体としてルサンティマンを重視する問題意識に貫かれている点である。労働者の自覚、権利意識の芽生えなどは意識調査のインデックスとして設定されることがない。その結果、松沢氏による一九一〇年代の日本の労働者のイメージは全体として卑屈であり猥雑である。松沢氏はそれが実情であったというかもしれないが、松沢氏の意図調査の基調としてのルサンティマン重視の問題意識はやはり検討されるべきであると思う。M・ウェーバーがいうように、ル・サンティマンについての指摘は魅力的な問題設定ではあったが、それですべての「神義論」を解くことはできないのである。

第三に、松沢氏の労働者意識の調査方法の問題性は、マルクス主義との関係が不鮮明な点にある。松沢氏は、システム論的方法論を明示したとき、この方法によって「国民経済の再生産構造における産業労働の位置から直ちに体制統合におけるプロレタリアートの政治的位置を導く方法の制約を補える」との考えを述べた(上記引用、傍点引用者)。ところが、松沢氏は、ほとんど同時に、Ⅷ階級闘争史的接近ⅤとⅧ構造Ⅱ機能的接

近Ⅴとの対比において、「両者の一元的な『統一』やそれによる対象把握が可能であると考えそれを意図するものではない」としてゐるのである（一一四頁）。「補える」としながら「統一不可」というのは、明らかな矛盾ではなからうか。

ちなみに、松沢氏のいうⅣ階級闘争史的接近Ⅴというのは、一九一〇年代の動向について「この時期の天皇制体制の歴史を『階級対立の展開』『基本的矛盾の激化』などの『客観法則』が『貫徹』する過程としてとらえ、この立場から労働運動・社会主義思想の政治的意義を高く評価しようとする」ものである。また、Ⅳ構造Ⅱ機能的接近Ⅴとは、「内部からの変革がついに不可能であった天皇制体制の現実の帰結を直視して、体制統合が閉じた過程として完結するメカニズムを抽き出そうとし、労働運動や社会主義思想をもそのような場においてとらえようと試みる。したがって労働運動についても、主としてそれが体制のカルチュアに滲潤され、また体制統合の政策に意識の内面までを把握される過程が注目され、その政治的意義の評価はより低くならざるをえない」とするものであった（一一〇六頁）。この部分も、松沢氏が方法論を方法論として論述した部分の一つになっている。

そして、松沢氏によれば、Ⅳ階級闘争史的接近Ⅴの場合、研究史の成果として「説得力不足」であり、その原因は「接近の視角と方法」にあるとされているのであった（同上）。松沢氏が採用している方法がⅣ構造Ⅱ機能的接近Ⅴであることはいう

までもない。Ⅳ構造Ⅱ機能的接近Ⅴの把握の中には、システム論、Ⅳ準批評Ⅴ論等、イデオロギー分析と機構分析のもつ限界性を超越する意図の方法論がすべて含まれているといえよう。そうであるとすれば、松沢氏は、システム論的方法がマルクス主義的方法の「制約を補える」とした見解をなぜ一貫させないのであらうか。わが国におけるⅣ構造Ⅱ機能的接近Ⅴは発生史的に見ても、Ⅳ階級闘争史的接近Ⅴを補うものとして位置づけられるべきものではなかったであらうか。

さらに一言すれば、松沢氏は、「運動が客観的な文書資料を容易に残さない点、また残された文書には現実に機能した思想内容が現れにくい点、ほかならぬこの点に労働運動の日本の特質の一つがあり、そのことが研究を制約すると考えられる」と述べている（一一〇八頁）。そもそも、「文書主義」とは、「非人間化」を特徴とする官僚制に付随する形式的合理化の手段であったはずである。その文書に「思想内容」が盛り込まれていないということがどうして「日本の特質」になるのであらうか。丸山真男氏は、日本の政治の特質を、「ハラの政治」という含意の無形のコミュニケーションに求め、研究者より政治部記者の方が実情に詳しい、とした。それはそのとおりであらう。しかし、丸山氏のその指摘には、「市民的自由のないところに政治学はありえない」とする研究上の制約を強調する意識があり、そこでは、市民社会的状況の欠落が政治学不在の理由として弁明されていた。丸山氏のこの考えは、与えられた自由がなけれ

ば政治学はありえないとする発想であり、社会科学の批判科学としての性格はなぜか無視されることになる。そして、松沢氏の日本社会主義運動の「特質」の指摘と研究上の「制約」についての考え方の披歴も、丸山氏のものと同質のものとなっているのである。しかし、日本の政治の体質が日本の政治の構造的分析を不可能とし、思想史的接近の有効性がそこに立証されるのであれば、今日の近代史・現代史に関する史料発掘状況は、そのような思想史的有効性を土台から覆すものとなっているといえよう。日本政治史への思想史的接近の出発点とはかく、その意義は、そのように簡単に覆えさせられてよいものではなかったはずである。

松沢氏の大正期労働運動の意識分析の方法論は、システム論にはかならなかった。明治社会主義運動の分析に見せた八準拠枠組Ⅴへの志向はどこへ消えたのであろうか。そもそも、松沢氏において、方法論としてのシステム論の採用は、方法論としての八準拠枠組Ⅴ論といかなる関係におかれているのであろうか。その点を明らかにするためにも次の「日本マルクス主義運動」の分析に入っていく必要がある。松沢氏は、日本のコミュニストの思想構造の解明の方法論としても、システム論を採用しているのである。

四、日本社会主義の特質

松沢氏の今回の著作の庄巻部分は、「日本マルクス主義運動」

書評 松沢弘陽著『日本社会主義の思想』

の思想構造を解明した部分であるといえよう。松沢氏における問題意識は、あくまで「日本社会主義」であり「日本マルクス主義」であった。「マルクス主義における思想と集団」なる論稿は、六〇月代の当初に発表されたときすでに、日本的「理論と実践の統一」なる論理に思い切った分析のメスを入れ、そのことによって日本的コミュニストの特質を浮彫にしたものとして、われわれ（すなわち松沢氏という八階級闘争史的接近Ⅴの方法論を採用するものたち）に衝撃を与えた問題提起であった。

「日本マルクス主義運動」は、社会改良主義派（右翼社会民主主義派）や中間派における「『勞働氣』的な集団表象」や「不安定な情緒的一体化」を生み出す非合理的の対極をなす合理的な、ただし「理論信仰」の思想構造を背景とする集団のダイナミクスとして特徴づけられている。「日本マルクス主義運動」には、社会改良派や中間派には見ることでできない「怒意的主観から独立した、社会認識の普遍的な理論」があった（一八九頁）。その点が、「日本マルクス主義運動」における「集団統合と思想との機能的関連」の特徴点であったとされている。

ところで、「社会認識の普遍的な理論」は、主体に癒着し特殊な人間関係のみにおいて伝達可能な「体験知」や「苦勞」とちがって、「客観化されてメディアにのり、思想の生み手、持ち主を離れて自由に流通し、学習によって習得されることが可能」であった。それは、その意味で合理的なものであった。し

たがって、マルクス主義は「高度の忠誠を喚起し得る思想」であるとともに「客観的に伝達可能な存在形態」をとっており、その結果、『組織』の拡張能力は絶大であった、と松沢氏はいう。ここから、これまでの通史的記述には見ることでできなかった次のような鋭い分析結果がもたらされることになる。すなわち、まず、「日本マルクス主義運動」において「激しい弾圧のため成員の流動率が高く、同一時点での運動現役者数は少ない」にもかかわらず、「新しく参加する者が不断に続いて『組織』の継続性を保証し、延べ参加員数は意外の多数にのぼる」事実の指摘である。次に、「最高の監視制度と温情的労務管理とを誇った」そのため運動の他のグループには侵入不能だった「基幹経営」に対しても、「日本マルクス主義運動」のもつ「思想の伝播能力」の強さは、「そこで働く労働者が思想の受容力をもつ限りこの思想の影響力が侵入することは阻止できない」のであり、その意味での「思想悪化」がしばしば「支配者層を恐怖」させたという事実の指摘である（一九〇〜一九一頁、傍点引用者。私はここで、片山潜が一九一八年、亡命中のアメリカから非法法に『平民』紙を発行したとき、その第一六号の英文欄で文字どおりボルシェヴィズムの contagious な性格を論じていた事例を思い出さずにはいられない）。

それにもかかわらず、「日本マルクス主義運動」においては「百パーセント主義」に見られる「理論主義的傾向」の存在が歴然としていた、と松沢氏はいふ。松沢氏は西欧・合衆国共産

党の大衆的前衛党の構造について、「コミンテルンが成立してから、人民戦線戦術を採用するまでの期間の入党者では、党の党外大衆むけのメディアに接触して、煽動のレベルで表現された党目的を認知した者は九七％にのぼっている」事実を重視する（この事実には G. Almond, *The Appeals of Communism*, 1954. に拠っている）。松沢氏はいう。「この数値から予想されるように、共産党への参加は必ずしもマルクス主義の理解・承認→入党という内面の過程を辿るものではなく、マルクス主義への忠誠や、共産党が示す政治目標への動機以外の何ものかが誘因となっている。」つまり、松沢氏によれば、「前衛政党が『大衆化』するため」には、前衛性を「譲歩」して「在来のカルチュアに妥協」する必要が生じ、そこに前衛党における「顕教と密教の分化と使いわけ」が生じるのであった（一九二〜一九三頁）。大衆的前衛党についてのこの指摘は、今日の意味をもつ指摘であるといえよう。とくに松沢氏が指摘している、大衆的前衛党が帰結する「複数のマルクス主義」が、「運動内部での政治指導の多元性」がもたらす不利は、指導の一元化・組織の序列化が実現した場合に生じることが予想される頹廢を相殺して余りあった」と判断する組織路線の方向に結びついている点など、「日本マルクス主義運動」の七〇年代における追究課題になっているといえよう。

だが、戦前の日本共産党の場合、「密教」がそのまま「顕教」化していた。「党の正式ないし実質上の機関紙は、理論の伝達

を役割とする『マルクス主義』や『党建設者』だけではなく、一見大衆的煽動紙ふうのものまで、その紙面には、むしろ先に見た欧米の共産党の場合には密教レベルに属する、長大で水準の高い原理論とそこから半ば演繹的に展開される個々の戦術行動の指令が幅濫しているのである（一九四頁）。この理由はなぜか。また、このことのもつ意味はどのようなものか。松沢氏は、その点を福本イズムの解明に求め、「理論と実践の統一」の福本イズムの把握を解明し、「共産主義→共産党組織→党指導者という『受肉の弁証法』の完成」に戦前の日本共産党の思想構造の特質を見出している。

マルクス主義における「理論と実践の統一」の論理構造は「認識と政策決定の技術論」であるとされているが、私もそのとおりであると思う。ところで、福本イズムにおいては（戦前の日本のマルクス主義と言っても同じである。なぜなら、松沢氏は「全過程を通じて、福本個人の政治的生命如何にかかわらず福本イズムの思考は一貫して『理論』と『組織』のあり方を規定し続けている」としているのであるから。一九九頁）、理論における認識命題と道德命題との一体化がなされていた。マルクス主義は「単なる『社会科学』や『労働運動の理論と綱領』（レーニン）という認識論・技術知」としてではなく、「厳しい実践倫理として受容」され、認識命題に道德命題性が与えられ、その論理構造が「理論と実践の統一」論にほかならなかった。「科学的社会主义」が「自由の王国」と結びつけられる

とき、「歴史主義の道德論」によって媒介されるのではなく、科学は、直接無媒介に信仰の「ロゴス」に化するという「日本マルクス主義の『不幸な運命』（加藤 正）」があったのである（二〇七頁）。松沢氏が挙げている典型的一事例と、それに関する松沢氏のコメントを紹介しておきたい。

「マルクス・レーニズムを研究するに当つて我々学究の徒を未完成のまま実践にかりたてるものは理論と実践の弁証法的統一に関する学説である。マルキシズムは……批判的に理解し実践的に立証する……革命的理論なくして革命的行動は有り得ないという命題は（日本では）マルクス・レーニズムに依つて武装せる人間にあつては（理論は）革命的行動に依つて発展させられるものであると云ふ風に解釈されるに至り、『理論から実践へ』のスローガンは『実践から実践へ』と云ふスローガンに発展するに至つた。この理論こそ最も多くのインテリゲンチヤーをして革命的行動にかり立てているものであると思ふ」（『左傾学生生徒の手記』第三輯、事例七九。本書二〇八頁。括弧内松沢氏）

「つまり日本の『理論と実践の統一』論においては、真理は既に教典の中に与えられている。したがって、真理を把握するために学習は必要ではあるが、そのみでは不十分であり、理論内容を実践することが不可欠だと主張されるけれど

も、この場合実践が必要とされるのは、学習した理論の検証やそこにはない新しい真理の発見のためではない。……真理は学習した教典の中に存在するがその『本質』的精髓は『インテリ』的『客観主義的』な学習のみではとうていえられない。それを『体得』するためには、理論内容の真理性を信じて疑わず、『確信をもつて』『先づ実践する』ことが必要不可欠であり、実践という行為を通じてのみこの真理を『身を以て……体現』しようというのである。先に述べた理論の『ロゴス化』の指摘にならってこの命題の構造を『知らんがために信ず』に類似しても必ずしも失当ではないであらう。(二〇九頁、傍点引用者)

こうして理論による組織化は達成されたが、その「組織」とは、信仰の「ロゴス」と化した理論の実体化であり、その意味で「組織」は日本共産党を代称する固有名詞として使われた。日本的な「理論と実践の統一」の論理は、「知らんがために信ぜん」を生みだすとともに「教会の外に救いなし」の状況をもたらした(二二三頁)。党員の資格要件としての「百パーセント主義」は、裏返していえば党員の「百パーセント」の「把握の重視」にほかならず、「共産主義→共産党組織→共産党指導者」という「受肉の弁証法」の成立をもたらした。いかえれば、これは「一枚岩」化において欧米の共産党に一步先んじたことを意味した。だが、その「一枚岩」の成立過程につい

て、松沢氏は、「家父長主義」「事大主義」「権威主義」等の「個性一般」の指摘にとどまることなく、「マルクス主義」「理論」の機能様式」としての「人間の『理論』へのかかり方」の問題を提起しているのである(二一四頁)。

日本の共産党が「一枚岩」化で欧米の共産党に一步先んじた結果、日本の共産党は「その代価を支払わねばならなかった」と松沢氏はいう。その「代価」とは何か？ 松沢氏は「前衛政党的崩壊」であったとしている。松沢氏によれば「前衛政党的崩壊は必ずしも、権力の弾圧それ自体、『極左偏向』による『大衆からの孤立』それ自体だけから生じたのではなかった」のである(二二七頁)。「ザハリヒな権限の序列にかわって人格的価値序列が、客観主義的な組織全体の目標に対する忠誠にかわって、直属上級者の意志に対する無限定の忠誠が現われる」ような前衛政党的は、「強固な全人格的結合の連鎖」にほかならず、「盟約共同体」とでも呼ばれるべきものであった。「盟約共同体」としての前衛政党的において「政策の実施→修正→新しい政策決定という、政策と現実状況とのフィード・バックあるいは政策の循環性」は成立しなかった。また、「この前衛政党的の場合、政策の実施過程では組織の抱く政策のヴィジョンを状況におしつけるのみで、政策の実際の効果を点検することを通じて状況を学習し、政策を修正する能力を欠いている」のであった(二二九、二二六、二二七頁)。これはまさに前衛政党的の機能喪失であり崩壊現象にはかならなかった。松沢氏の前衛政党的自己崩壊

論は、結果責任の倫理による前衛党の戦争責任追究の視点よりさらに即物的な視点からする、機能喪失と構造的内部崩壊の必然性の指摘であるだけに、前衛党にとってきわめて深刻な問題提起として受け取められるべき内容をもっていると理解すべきである。

そして、ここでもまた、松沢氏の方法論を問題にすれば「共産主義→共産党組織→党指導者」という「受肉の弁証法」の指摘は、一つの明確な図式の提示であり、その意味で戦前の日本共産党の行動様式をシステム化してとらえたものと見做すことができる。しかし、本来のマルクス主義における「理論と実践の統一」の論理がもつ「認識と政策決定の技術論」としての均衡機能はそこでは見失われる。「理論」の信仰の「ロゴス化」と、「組織」の偶像化は「受肉の弁証法」を内実とする日本的「理論と実践の統一」の論理に「政策と現実状況」とのフィード・バック機能を与えることはなかったのである。松沢氏は、戦前の日本共産党に均衡機能を喪失したシステムを見ることによって前衛党の自己崩壊の内部的要因を鋭く抉り出したのであった。

ところで、松沢氏の以上のような意味におけるシステム論的方法の問題点というべき点は、松沢氏におけるシステムとしてのモデル設定の背後に潜む研究者の問題意識としての△準拠枠組√の存在である。△受肉の弁証法√が生み出される価値意識の状況が松沢氏によっていかに把握されているかではなく、受

肉の弁証法を明らかにする松沢氏の価値意識がいかなるものであったのかをここでは問題にしたいと思う。ある価値意識が研究者個人の△準拠枠組√とされ、そこから理念型としてのある現実解明のための構図が描かれることになる、と私は理解している。その構図はシステムとなり作業仮説となるのであるが、その際、研究者の問題意識としての△準拠枠組√と設定されたシステムは一つの世界となり△目的合理性√を備える。しかも、ともすると、その△目的合理性√は△整合合理性√的なものとして自認されやすい。

以上のような私の理解からすれば、松沢氏の戦前の日本共産党に対して恥部を露出させるような分析である不能なシステムの解明は、松沢氏のどのような価値意識から派生したものであるかが問われなければならないことになる。そして、松沢氏において△目的合理性√と△整合合理性√の関係は如何に峻厳に隔てられているかがチェックされなければならないことになる。私の読みからすれば、松沢氏の研究の出発点としての△準拠枠組√は、五〇年代共産党の家父長的指導と近代的党構造に対する実感的反撥の内容としているもののように思われてならない。あえそう言う根拠として次のような松沢氏の記述を挙げさせていただく。

「こと新しく述べる迄もなく、この『命令絶対服従』の『民衆集権制』組織では、すべての政策は、どこか『上の方』の

『えらい人』によって決定され、直接の上級者を通じて与えられるものとして存在する。そしてザハリヒな組織規律からして命令が受容されるのではなく、『えらい人』が真理の『体现』者であつて（党『はまちがうはずがない』』というの
は黨員、さらにシンパの間にひろがった確信だつた）、命令に服従するという行為がそれ自身が『プロレタリア道徳』として価値を持つものだから、命令に対する受容度はきわめて高い。（二二〇頁。これは単なる戦前の共産党についての分析的記述であつたであらうか？—引用者）

「こうして直接に接触する少数者の間に生じた、事実認識の不一致や実行の上での過誤に対する不満が、相手は、集団全体に対し、更にマルクス主義の思想そのものに對し、裏切っているのではないかという疑念を惹き起し、それぞれに、自己の忠誠と正統性を確信するメンバーの間の疑心暗鬼が連鎖反応的に集団の全体に伝播する。集団を支える『理論』のモラリズム化の極……強い凝聚力は消滅して集団は実質上崩壊状態となる。それは『スターリン体制』終焉前夜の各国共産党の『総点検』にあるいはさらに中世教会末期の異端密問にも通じる、教義への忠誠によって結合され、『組織の教義』へのコンフォーミティの強化によって維持される集団に特有の病理の末期症状といえよう。」（二二九頁、傍点引用者）

ここには明らかな五〇年代共産党に対する批判意識を読みとることが出来る。戦前の日本共産党の「不能なシステム」の解明は、五〇年代共産党への批判を八準拠枠組とするものであつた点をここで確認しておきたい。なぜその確認が必要か。私は松沢氏による「受肉の弁証法」の論理展開に藤田省三氏による「受肉の弁証法」の論理を対応させてみる必要を感じる。藤田氏は「維新の精神」を、普遍的価値への献身と、運動における敗北にもかかわらず普遍的価値が社会へ浸潤していく「受肉」の過程に見いだした。その上で藤田氏は「維新の精神」の継承者を日本の政治史の上で模索する姿勢を示したのである（『維新の精神』一九六七年、参照）。松沢氏も、「日本マルクス主義運動」に普遍的価値への接近としての「社会科学」性を見いだしていた（一八九頁）。それにもかかわらず、日本のマルクス主義者の普遍的価値への献身を評価する問題意識は松沢氏において八準拠枠組とされることがなかった。松沢氏における戦前の日本共産党の「不能なシステム」の解明は、あくまで、日本のマルクス主義者の有り様に対する突き放した批判意識というある個性的な、それだけに一面的な問題意識を八準拠枠組とすることにより成り立つものであつた。松沢氏に対しては、藤田氏との比較において、その一面的な問題意識性をはっきりと指摘できるように思う。

松沢氏は、戦前の日本共産党のもつ特徴を「不能なシステム」においてとらえた。それはまことに鋭い分析であつた。松沢氏

は、さらに、その不能なシステムを導き出す日本のコミュニストの八準拠枠組Ⅴを明確にすべきであった。システム論と八準拠枠組Ⅴの論理構造からいってそれは当然なされるべき作業であった。あるいはM・ウェーバーにおける理念型とエーラストの論理連関からいってそういえるのである。しかし、松沢氏は、「日本マルクス主義運動」のエーラストの問題については、「これをすべての真理を『道』—存在にして当為—と意識する日本の原哲学の呪縛の結果と考えても大過はないだろう」(二〇七頁)という程度にしか分析してないのである。そして「日本社会主義運動」の八準拠枠組Ⅴのかわりに示したのが(というより露呈させたのが)松沢氏自身の、すなわち分析者自身の戦後・スターリニズム段階における、あるいは日本の五〇年代における家父長的共産党への厳しい批判意識であった。しかも、松沢氏において、研究者個人の八準拠枠組Ⅴとそこから生み出された構造模型としてのシステムはそれなりに一つの世界を作りあげて完結してしまい、研究者個人の八準拠枠組Ⅴが検証されるチャネルは見いだされなままに終っている。松沢氏における八目的合理性Ⅴはそのまま八整合合理性Ⅴに転化される傾向性を示しているといえるのである。

五、日本における民主社会主義の潮流

日本の労働運動への、本格的な思想的接近の最初の記念すべき業績として、しかもその論稿が発表されて以来今日に至る

書評 松沢弘陽著『日本社会主義の思想』

まで、容易に乗り越えることを許さない重みをもった業績として、労働運動史なり現代史なりを専攻するものにとつて注目されてきた松沢氏の論稿が一九六〇年に発表された「天皇制体制における労働運動リーダーシップの諸類型」であった。この論稿はついに未完成のまま本書の「日本の労働組合主義」を構成している。松沢氏の問題提起は、一見、これまで評価されることとのなかった日本労働運動の右派部分、とくに西尾末広によって代表される右翼社会民主主義者の潮流、その指導理念としての「健全なる労働組合主義」を高く評価するものであるかに受け取れる論述を伴っている。たとえば松沢氏はいう。「健全な労働組合主義」と社会民主主義を標榜する指導者たちは、自己のおかれた立場を、八方から包囲され、しかも組織の内部にもそれと通じかねない異分子をかかえた孤立の状況として意識したのであった。このような自己認識は、少なくとも、マルクス主義のがわの彼らに対する『ダラ幹』『労働官僚』といったイメージとは、かなりずれていることが明らかである。……マルクス主義は、労働運動者が求めるもののうちの何ものかを見ぬいてそれを実現することができず、逆に『苦勞人』タイプの指導者達は、マルクス主義がとらえなかったものをとらえることによって、ラディカルまでをふくめた組織化に成功するのである。……この過程を指導者が支配層の『恰と鞭』に替え模倣され、『直接的買収』と『取引』して『大衆を売渡す』過程として否定しざること、それは彼ら『ダラ幹』に『本質的』な知的

無能力、道徳的低劣のゆえだとするだけで問題は意味の十分な解明はできないであらう。」(二四八―二四九頁)

これは、いわゆるイデオロギー批判的な運動史接近の方法についての前烈な批判である。ところで、日本労働運動における右翼的潮流の評価は、松沢氏以外にも、たとえば渡部徹氏などによってなされてきたことはよく知られているとおりである。しかし、松沢氏の評価の方法と渡部氏の評価の方法との間には多少の違いがあるように思われる。渡部氏は戦前の総同盟を評価する場合、評価する立場自体を「健全なる労働組合主義」にはじめから埋没させてしまっていたのであるが(この点については、拙稿『実践的労働組合主義』の形成『社会労働研究』第一九卷一・二号参照)、松沢氏の場合は一応は「健全なる労働組合主義」を一つの思惟様式として突き放して評価し、同時に見据えていく姿勢を失っていない。したがって、結論としては、松沢氏の「健全なる労働組合主義」論は、内在化の方法による、それだけにもっとも辛辣な、批判の要素を含む評価となっているのである。

さらに松沢氏の場合、日本の労働運動の右派的潮流の評価の視点として、単に西尾末広の右翼社民(『現実主義者』たち)を視野におさめるだけではなく、蝦山政道・猪木正道など、民主社会主義の理念の提唱者(松沢氏のいう「人格的自由主義の系譜をひくもの」たち)をも視野におさめている点に特徴がある。未完の名論文『天皇制体制下における労働運動リーダーシ

ップの諸類型』は「共同研究・転向」における民主社会主義論によって補完されているのである。ただし、内容的には、未完の名論文は未完のまま、民主社会主義論に示される安易な価値意識の露呈に短絡されていると見るべきであるかもしれない(この点 後述)。したがって、以下においては、松沢氏による右翼社民的潮流の分析と民主社会主義的潮流の分析とを、松沢氏が同一の視点から追究しているものとして把握し、その分析結果と方法論の展開状況についてコメントすることにしよう。両者の分析に含まれるニュアンスにも注目することにしたい。

西尾末広に代表される日本の右翼社会民主主義の思考様式を、松沢氏は卑俗な「経験主義」にはかならない「現実主義」としてとらえている。日本的「現実主義」についての松沢氏の論証内容は、いまさら紹介する必要のないほどよく知られているものと思われるが、簡単に要約しておこう。松沢氏によれば、マルクス主義の認識論の特徴は「演繹的な発想の傾向がいちじるしかった」ものとされている。それはそのとおりであろう。松沢氏は、マルクス主義の認識論が「未来↓現在の演繹」であるとともに「大状況の概念↓小状況の概念の演繹」であることを指摘した上で、その演繹的な論理が「多分に価値づけの方向でもあった」点に問題点を認めている(二五二―二五三頁)。そこから日本的「理論と実践の統一」の論理が生まれてくることを松沢氏が問題にしているのであったことは先に見たとおりである。松沢氏によれば、日本の右翼社会民主主義者の

思考模式で評価すべきメリットとなっているのは、このようなマルクス主義者の演繹論に対し「経験的現実主義」を対置した点にあるのであった。松沢氏はいう。「経験的現実主義者」の言葉の中で最も頻繁に用いられ、かつ最も多義的なのは体験という言葉である」(二五五頁)。「苦勞人」の『長き体験の叡智』は彼らが「ブルジョワ教育と五十歩百歩の範疇劃一主義」と非難したマルクス主義者の知識―それは「教程」による「理論闘争」―『階級意識注入』の所産であった―に幾つかの面で優っていた」(二五七頁)

だが、日本の「現実主義」は「経験主義」と呼ぶにはあまりにも卑俗なものでしかなかった。第一次分裂直後の日本労働組合総同盟の教育方針は「理論は労働者の経験と判断を整頓し合理化する要具に過ぎない」としていたのである(傍点引用者)。西尾末広は「如何なる理論も経験に依って修正され得るものがあり、理論は尊重しなければならぬが理論を固定せしむるのは危険である」と繰り返し強調していたのである。そこで松沢氏はいふ。日本の「現実主義」は、理論を「要具」としてしか位置づけず、理論を「要具」として採用するか否かは「体験知」に適合するか否かによって決定され、「限られた『経験』をこえる理論の固有の意味」に気づくことはなかった、と(二六一頁)。

プラグマティズムにおける「道具主義」においてさえ、デューイの「探究の理論」の場合として松沢氏は検討しているので

あるが、そこには「具体的・個性的・實在的な判断と抽象的・普遍的・非實在的な理論との間に存在する緊張関係が強調され、相互の連続的な移行は否定される」(傍点引用者)のであった。松沢氏はこう確認した上で「われわれの『経験主義者』の場合は、これはむしろ逆である」といい、西尾末広などの思考模式に特徴的なのは「理論の普遍性抽象性を狭い体験知の中にいわば融解し、理論の規範性を抽き去ることであった」と結論している(二七〇頁)。日本の右翼社会民主主義の思考模式の特徴は、理性的なるものの拒否にあったとされているのである。

重要な指摘と思われるのは、この卑俗な「経験主義」としての「現実主義」的思考模式が、単に西尾末広のような右翼社会民主主義者の場合に見られるだけではなく、「左翼冒険主義」への反動としての「日常要求主義」「身のまわり主義」というようなコミュニストの運動を支える思考模式にも共通して存在しているとしている松沢氏の発言内容である。「わが国の大衆運動の歴史を通観すると、『極左主義』『教条主義』『官僚主義』の病理が亢進する時、その対策として『日常要求』『自分の問題』―『実感』『体験』―『大衆』『職場』『現場』等の観念を強調する思想が繰返し登場する。それは公式の政策や教義のレベルでは多くはマルクス主義をとり、労働組合主義・社会民主主義に立脚するという理由で、総同盟的な運動を批判するが、それにもかかわらず、思维様式のレベルでは総同盟と同じ

タイプを階級していると考えられる場合が多い。……戦後は運動の対策における極左主義とならんで組織の巨大化、官僚制化という新しい問題が発生した結果、その対策としてもここにあるような思想傾向が生じる機会は更にふえたと思われる。例を引くまでもないが、『日常要求主義』、『実感主義』、『職場主義』、『大衆線路』などとよばれる運動の中にはわれわれが問題とする思想傾向が見られることが多い。(二五〇～二五一頁、傍点引用者。)

ここでも、松沢氏の戦後の日本共産党に対する具体的批判の問題意識が「日本マルクス主義運動」批判の原点になっている形跡を見ることができるのであるが、それ以上に、この場合には、渡部徹氏におけるような右翼社会民主主義の潮流に対する自己投入の肯定的評価の姿勢とは異なった、あくまで、「日本社会主義」の思想的特徴を追究するという松沢氏の思考的営為の厳しさを認めることができるであろう。それにしても、ここで強調しなければならないのは、卑俗な「経験主義」としての「現実主義」をも、日本社会主義の思想的特徴として松沢氏が指摘するのであれば、松沢氏の鋭利な分析は、その「現実主義」的思維様式の存在の指摘にとどまることなく、 $\wedge$ 様式 $\vee$ を支えるエートスの領域にまで拡大されるべきであったことである。だが、なぜか、松沢氏の分析はエートスの領域にまで深化させられることはなく、 $\wedge$ 様式 $\vee$ の確定でとどまっている。先に、日本的「理論と実践の統一」という不能なシステムの指摘

の場合にも、松沢氏は、そのシステムを生み出す思想的基盤とでもいうべき $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ の問題領域には深く立ち入らないでいる事実を問題にしたが、ここでも同様な松沢氏の方法論を見いだすことができるわけである。さらにいえば、先の場合も、今回の場合も、松沢氏が示している(というより露呈させている)のは、戦後の、とくに五〇年代の日本共産党への「体験知」的に語られる批判意識である。

松沢氏は「日本の労働組合主義」として「現実主義」の潮流をとらえ、日本における右翼社会民主主義者たちの思想構造を明らかにしようとした。その際、松沢氏は、第一に指導者の「知性の構造」、第二に「運動への献身を義務づける価値意識」、第三に「集団構造の特質」を分析するという方法論を示した(二五〇頁)。しかし、松沢氏の分析は第一の段階でとどまり第二の段階へ進んでいない。松沢氏における $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ の方法論的問題意識の存在をここで確認できるが、かの名論文の未完の事実が示すものは、実は松沢氏における $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ レベルへの分析の深化の未然性であったのである。

松沢氏の方法論的問題意識について、あえて大胆に言えば、こういえる。松沢氏は、五〇年代共産党への批判を原点とする問題意識で、明治社会主義の素朴さにあこがれ、大正期労働運動のルサンティマン的要因に目をおおい、昭和初期マルクス主義の実態に阿諛ともいえる批判をあびせかける。その松沢氏は、日本のコミュニストの思考様式に対する一つの現実的意味

をもった批判として、右翼社会民主主義的潮流における「現実主義」を積極的に評価するが、松沢氏の「現実主義」評価はあくまで日本のマルクス主義批判の問題意識によるものであって、松沢氏が日本の「現実主義」的立場、とくに右翼社民的立場に全面的にコミットすることをいささかも意味しなかった。

松沢氏が、一度は「現実主義」に内在し、そこからするマルクス主義批判を試みているだけに、一歩進んで松沢氏が、「現実主義」を内部から告発するとき、その告発の内容は外から与えられる「現実主義」批判とは比較にならない鋭さをもったといえよう。ただし、松沢氏のそのような右翼社会民主主義批判の論理は、次に見る日本における民主社会主義の潮流に分析のメスが入れられるときにも同じく採用されているとはいえない。

そもそも、本書の構成からすれば、右翼社会民主主義なり民主社会主義なりに対する批判が日本社会主義分析の最後の部分を構成している仕組となっており、それは、松沢氏の日本社会主義への最後の期待が、あるいは、日本労働運動の右派部分の動向にかけられているのではないかという暗示を与えるものとなっている。

日本における民主社会主義の潮流は、松沢氏によって第一世代と第二世代に分割されて分析されている。両者に共通するのは自由主義という思想的立場であるとされている。たとえば第一世代に属するとされている蠟山政道は、大正期の人格的自由主義の一種としての「社会的自由主義」として、内容的には全

成員の有機協調を目指す「国家的自由主義」としてとらえられている（二九三頁）。第二世代に属するとされている猪木正道や社会思想研究会の人びとは、同じく大正期の人格的自由主義に端を発する「人格・自由の観念」を特徴としているが、ただし「自由の観念」の意味内容についてはそれほど「つきつめた検討」はなされていないとされている（三六六頁）。そして松沢氏は、これらの日本の民主社会主義者たちに、「日本自由主義の嫡子」としての「自負」があることを認めているとともに、「状況把握のリアリズム」と「社会技術重視する」姿勢とを認め、「現実主義」の思考様式に属するもの、との規定を与えている（二九〇頁）。

松沢氏は、これらの自由主義者たちの思考様式を問題にしているのであるが、第一世代にも第二世代にも共通するのは転向経験であるとしている。蠟山政道について、松沢氏は戦前転向とともに戦後転向を指摘している。蠟山には転向現象のサイクルが見られるほどであるとされている（三四二頁）。猪木正道について、松沢氏は河合榮治郎の「思想原理の同一性の固守」への志向がありながら、実は「総力戦経済論から戦後の戦闘的社会民主主義論への移行」があった事実を指摘している（三五七頁）。さらに、民主社会主義の場合、松沢氏によって「精神の硬直」が、あるいは「モラリズム的・政治主義的な硬直傾向」が共通する思考様式であり転向の原因であったとされている。蠟山政道の場合には、「緊張の激化が、精神を硬直させて、現実

的であることを求める努力の結果、かえって現実の流れに溺れそれを追認させるに至り、ここに転向が生じた」とされている(三四四頁)。猪木正道の場合は、「こうして意図せずその自覚もない特異な転向は一つには、固定観念によって現実をとらえ進路を定めた結果だった。自己のイメージと状況とのフィード・バックへの志向および能力の貧しさは、激しい政治的緊張の状況の中におかれた河合を中心とした小グループに、戦闘的自由主義が生まれたときから負わされた重荷だった」とされている(三七六頁)。その上で、松沢氏は、民主社会主義により知的で柔軟な自由主義を求めるのであるが、ここで問題なのは、松沢氏の以上のような分析と要請の妥当性の問題よりも、民主社会主義にあくまで何かを求めてやまない松沢氏の価値意識の露呈ではなからうか。松沢氏は、日本のマルクス主義に対しては見せることのなかった脱皮の要請を(唯一の例外としては、松沢氏の日本共産主義者団に対する高い評価があった。二三七頁)、日本の民主主義者たちに対しては次のように積極的に行なっているのである。

「民主社会主義者の自由・人格の理念といい、また現代国家・現代資本主義の特質の認識といい、社会主義の再定義といい、その多くは適切であり、また新しい論点を先取りしたものの少なくない。」(三七六頁)

「(1)まず、人格・自由の主張を一義的な政策・イデオロギーの体系に実体化するのでもまた、それを特定政治勢力のための組織像徴として操作するのでもなく、人間を状況における自由な行動主体として成熟させ、またそのために、自由主義を行動科学の次元にまで展開する必要がある。……(2)自由主義の政治態度の一つの特質は、政治よりも政治以外の価値を充盈することに力を注ぐとともに権力の侵害からそれを守ろうとするところにあると言えよう。……それならば、直接の政治的効果の打算をこえて、守るに値する其の意味のアカデミーの世界、無償の隣人愛の事業などに、より多くの力を注ぐことが、マルクス主義の病理を『克服』するにはより有効なものではないか。(3)そしてさらに重要なのは、こうした精神態度を全ての立場に惜しみなく分け与えることではないか。それが実行される時こそ、たとえ自由という言葉が語られること少なくなり、民主社会主義を標榜する集団は消えても、自由の思想、そして新しい社会主義は社会にみわたつて将来にわたる生命を獲得するのではなからうか。思想構造上『本質的』に暴力的と考えられたマルクス主義に対しても、『だまされ』『利用される』可能性を計算した上で、それを回避し、ないし被害を最少にとどめる配慮をもって大胆に接触するならば、民主社会主義者にとって思いもかけぬ変化がマルクス主義に生じることもありうるだろう。」(三七六―三七八頁、傍点引用者。)

松沢氏は、右において、普遍的価値としての自由、そのトレイガーとしての民主社会主義者を設定し、社会が民主社会主義を「受肉化」する過程を想定した上で、「受肉化」過程での献身を説いているのである。

右の要請を、松沢氏による民主社会主義者としての自己確立宣言と見做すのは早計であろう。しかし、卑俗な「経験主義者」としての「現実主義」者たちに対しては少しも見せることのなかった精神的コミットメントが、人格的自由主義の系譜をひく民主社会主義者としての「現実主義」者たちに対しては充分に見せられていることを右の要請において確認できるのである。そして、松沢氏が、日本の民主社会主義に対し具体的処方箋を与える積極性を示した事実、何を意味するのであろうか。結論からいえば、ここに見ることのできるものは、松沢氏における方法論的泥迷以外の何ものでもない。

研究者の個人としての価値意識は、一定の問題意識となつて現象解明の仮説的構造模型を与えるであろう。この両者の関係は思想的立場と理念型とか、 $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ とシステムとして整理できるのである。しかし、松沢氏が日本社会主義運動に関して行なつた理解は $\wedge$ 目的合理性 $\vee$ に貫かれた了解図式の把握にすぎない。M・ウェーバーは $\wedge$ 目的合理性 $\vee$ について $\wedge$ 論理整合性 $\vee$ として説明し、「知的・理論的なばあいであれ、あるいは実践的・倫理的なばあいであれ、或る立場を選択するさいの論理的なあるいは目的論的な『首尾一貫性』という意味におい

て合理的なものは、歴史的生の他の諸力に比べれば限られた、不確なものであるとしても、これまた人間を支配する強い力をもっている」と述べている〔『世界宗教の経済倫理・中間考察』〕。松沢氏は $\wedge$ 目的合理性 $\vee$ の「人間を支配する強い力」に憑かれたまま、その支配力から脱却することを求めているように思われる。M・ウェーバーによれば、 $\wedge$ 目的合理性 $\vee$ の世界のほかに、もう一つ、「まったく別種のもの」として「客観的に『妥当なもの』を基準にして『整合的に』に行なわれる整合合理的行為」の世界があるのであった〔『理解社会学のカテゴリー』〕。松沢氏は、 $\wedge$ 整合合理性 $\vee$ の世界に踏み入ることをして

いないのである。松沢氏が、たとえばあるシステムを設定した場合、さらにそのシステムを支える客観的な $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ の解明に思想的分析の方法を深化させていたのであれば、実証的に析出された $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ との接触によって、研究者個人の原点として最初に設定した、おそらくは $\wedge$ 体験知 $\vee$ にもとづくものであろう個性的問題意識としての $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ の客観性を、検証する機会を見いだすことができたはずである。松沢氏は、方法論としては、第一に「知性の構造」、第二に「価値意識」、第三に「集団の構造」というように、システムを $\wedge$ 準拠枠組 $\vee$ で、さらには組織論で構造化し、個性的問題意識による理念型的仮説を対象化する方法を目指していた。この対象化の過程こそ、松沢氏にとって $\wedge$ 目的合理性 $\vee$ の世界から $\wedge$ 整合合理性 $\vee$ の世界に脱出する過程であつたはずである。しかし、松沢氏は

脱出の過程を辿らなかつた。松沢氏は、客観的な「準拠枠組」の提示のかわりに、研究者個人としての「準拠枠組」を露呈させるにとどまつたのである。

冒頭で指摘したように、松沢氏の思想的接近は、マルクス主義的な機構分析の批判者としての出発点をもっていたと思われる。当初から与えられていた機構分析を忌避する方向性が、松沢氏をして「整合合理性」の世界へ立ち入ることを拒否させたものであると理解したならば、それは誤解であらうか。

六、むすび

今日、日本政治史とくに現代史・労働運動史への接近は、二つの方向で機構分析の細微化を目指すものとなっているように思われる。一つは、機構分析の超克を出発点とした思想的分析が、「準拠枠組」とかシステム論であるとか「権力衝動」などの指導概念の使用段階を通過して、機構分析の細微化としての構造分析の段階に到達している動向によるものである。伊藤隆『昭和初期政治史研究』（一九六九年）であるとか、日本政治学会編『「近衛新体制」の研究』（一九七三年）などに、思想的分析の方向が、「基底体制への還元」を避けた「上部構造」の分析を、細微な機構分析の分野に求めはじめ、もはやその動向は思想的分析とはいえない内容のものになっている具体例を見ることができよう。

もう一つの動向は、マルクス主義の立場を明確にしてなされ

る機構分析・機能分析の試みである。この場合、依然として通史記述的段階から踏み出すことのできない水準にあるが、最近、史的唯物論という方法的枠組の再検討が根本的になされはじめ、これまでとは異なつた角度と精度による機構分析が機能分析の視野をも含めつつ展開される気配にある。たとえば、一例として挙げることができるのは田口富久治ほか『政治の科学』（一九七二年）である。そこでは「マルクス主義政治学」が宣言されるとともに、史的唯物論の枠組へ政治過程論、システム論等の問題提起が組み込まれようとする見解が大胆に展開されている。たとえば、「政治体」(body politic)は「政治体系」(political system)にはかからないという把握がそこでは示されている。このような「マルクス主義政治学」は、やがて日本の政治史・現代史・労働運動史に、これまでにない肌理の細かい接近を試みさせることになるであらう。

松沢氏の『日本社会主義の思想』は、いわば思想的接近の極致を示すものであった。それは、マルクス主義的機構分析・イデオロギー分析の及ばない領域を新しい方法で開拓し、これまで盲点になっていた問題を解明してみせた。しかし、松沢氏の思想的接近は、出発点がマルクス主義的機構分析から分岐する方向性をもつものであったがゆえに、その極致においてある種の偏りを示すものとなつた。鋭いが一面的な分析の結果として与えられる映像に安住する停滞性が松沢氏の方法論に見られたのである。マルクス主義的な機構分析とイデオロギー分

析は、松沢氏が試みたような八準拠枠組[△]とかシステム論などの方法論的試みをも充分に内に含んだ形で、今後、展開されていくことになるであろう。松沢氏が陥った、思想史的方法に特有ともいえるべきある種の偏りを克服する方向は、やはり体制の理論枠組を見失わない方法論的立場にのみ見いだすことができるようである。

*

*

*

松沢氏の『日本社会主義の思想』には、(1)『天皇制体制における労働運動リーダーシップの諸類型(一)』『社会科学研究』第一一卷五・六号、一九六〇年三月、所収 (2)『マルクス主義における思想と集団』『近代日本思想史講座 第五卷 指導者と大衆』一九六〇年九月、所収 (3)『民社会主義の人びと』思想の科学研究会『共同研究 転向(下)』一九六二年四月、所収 (4)『明治社会主義の思想』日本政治学会『日本の社会主義年報 政治学 一九六八年』一九六八年九月、所収、の四点が収められている。いずれも克明な、そして鋭い論理に満ちた諸論稿であることはいうまでもないが、とくに私の場合、一九六〇年に発表された二論文の方法論的斬新さから受けた強烈な衝撃は今日まで忘れることのできないものとなっている。今回、一書にまとめられた形で再読し、その際、生意気な表現を許していただけば近來にない「知的な興奮」を受けた。再読したのはある雑誌に書評を発表するためであったが、その書評をまとめる前に、発表形式や原稿枚数に拘泥せず、一度、松沢氏の世

界に入り込み、もし可能ならばそこから脱出する道を見いだす作業を自分に課するの必要を感じた。その作業の結果がこの八研究ノート[△]風の八書評[△]である。はたして松沢氏の世界を八突破[△]できたかどうか、今、あらためて考え直している次第である。松沢氏の著作を、角度と材料をいささか変えるとはいえず、二度にわたって書評させていただくことになるので、一言、お断わり申し上げておきたい。

(筑摩書房、一九七三年七月刊、三八五頁)